

樋口一葉の『われから』 におけるお町の「一念」は成就するか (一)

朴 那 美

1. はじめに

『われから』は明治二十九年五月、『文芸倶楽部』に発表された一葉最後の作品である。一葉は二十九年春には既に病に冒されていたと知らされており^(註1)、この『われから』の創作に当たっても相当の病身であったことが十分推察できる。病中の、死の影が近づくのを感じ取っていた一葉は、この小説を通して「愛」と「金力」を痛切に語ろうとした。主人公のお町は金銭的には恵まれていながらも、肉体的かつ精神的に愛に飢えた女性として描かれていて、その母の美尾の方は娘とは反対に真の愛に恵まれていながらも栄華を求めた女性として描かれている。小説はこの二人の女性における「愛」と「金力」を主に扱っていて、女性の物語かのようにみえるが、最も注意しなければならないことは「愛」と「金」の関係において受け身としての女性ばかりを取り上げたのではなく、男性との関係から生じる「愛」と「金力」を主題として取り上げている点であろう。病身の一葉が自分の最後の小説の主題として取り扱ったのは、もっとも身近な「死」の問題ではなく、人間関係から生じる「愛」と「金力」の問題だったのである。特にこの小説では親子関係、夫婦関係を中心に愛と金の相関関係が描かれているが、本論ではそのような人間関係を核にして、本号にはお町と美尾、美尾と金村与四郎、金村与四郎とお町を、次号にはお町と金村恭助を取り上げ、それぞれの関係から生じる「愛」と「金力」の問題を探っていきたい。

2. お町と美尾

お町と母親の美尾、美尾とその娘のお町は、外観からも似ている母娘であ

ると設定されている。第三章冒頭は、お町が奥様と言われる身ながらその美貌ゆえに「あれは新橋か」と芸者に間違えられるところが語られ、続いてその容貌が母美尾と瓜二つとされる。

目鼻だちより髪のかゝり、齒ならびのよい所まで、似たとは愚か母様を
そのまゝのうまれつき、

母の美尾自身も、「出てある人であらうなら、恐らく島原きつての美人」（四章）と、外観だけでなく、「芸者」のような美貌からなる内面までも似ていることがこの母娘の関係においては重要な役割をしている。特に美尾については、

浮世に鏡という物のなくば、わが妍きも醜きも知らで、分に安じたる思い、九尺二間に楊貴妃、小町を隠して、美色の前だれ掛、奥床しうて過ぎぬべし。万づに淡々しき女子心を来て揺する様な人の賞め詞に、思はず赫と上気して、昨日までは打すてし髪の手、つやらしい結びあげ、端折りかゝみ取上げて見れば、いかう眉毛も生えつゝきぬ、隣より剃刀をかりて顔をこしらゆる心、そもそも見てくれの浮気になりて、（四章）と、地の文にあるように「人の賞め詞」に乗せられ、「見てくれの浮気」になってしまった女心が描きだされている。人の詞に乗りやすく、栄華の夢を追う女心は、上野の花見の時を契機に「はかなき夢に心」が迷ってしまう。

「ある限りの体裁をつくりて」、うれしく出掛けたときに、豪華に着飾った華族様の一行に出会ったことから、「比ぶる」ことを知ってしまった美尾は、やがて自分自身の立場を見つめるようになり、それが物質的で華麗なものの指向へと変わって行く。夫の愛情だけでは満たされなかった物質的な欲望を追いかけてついに美尾は不義に至ってしまうのである。

美尾の娘のお町は、母が追い続けた富を手に行っている。しかしそれはお町の生の空白を埋めるものとはならない。結婚して十年あまり、子がないことがそれを増幅させている。小説のどこにもお町が子供に愛着をもっていること記されていない。美尾の方も子供には何らの愛着ももっていないのであって、それは共通である。一葉は美尾も、お町も、家族主義的な発想の犠牲・奉仕というものより、自分自身の欲望とエゴイズムに生きた人物として描こう

としたのではなかろうか。

夫に愛を求めつつも適わず寂しく生きるお町の孤独は、もともと肉親の愛をもらえなかったことがその根底にあるといえよう。お町は母親の暖かい愛情をうけたことがない。また父親さえも金力を求めて夫を捨てた妻に似ている娘には愛情を注がなかったのである。お町が夫に愛を求めたのは欠けた肉親の愛の補償であったと考えられる。美尾はお町を妊娠したとき、隣近所の人々より「おめでとうござります」と言われても暑い時期にもかかわらずはんてんを脱がないで恥ずかしがっていた。出産のおりの描写においても、父親の与四郎の方は「可愛く」「嬉し」い様子を見せているのに対して母親の美尾については何も語られていない。

お町と美尾は親子関係とは言え、肉親間の愛は見えず、お町は、特に母親からの原初的な愛情をうけたことのなかった女性として描かれているのである。

3. 美尾と金村与四郎

美尾は夫の金村与四郎に愛され、大切にかしずかれながら、腰弁の夫に飽き足らず、家を出たことになっている。夫に「金力」を求められないことを知っていた美尾の当然行き詰まった思いから出た結果であったろう。美尾と与四郎の夫婦仲は金によって壊れる。つまり「金力」を求めた妻の美尾の心の揺れから二人の夫婦関係は壊れ始める。花見の時、美尾は華族と比べることからその時まで気づかなかった自分のみすぼらしさを知ってしまう。それから、美尾は変貌する。

その過程の描写を見てみると、美尾の変貌の最大の原因が「金」であることがわかる。花見の直後の描写には、

はかなき夢に心の狂ひてより、お美尾はありし我れにもあらず、人目なければ涙に袖をおし浸し、誰れを恋ふるとなけれども、大空に物の思はれて、勿体なき事とは知りながら、与四郎への待遇きのふに似ず（四章）とあり、ついに美尾の口からは「お気に入らぬ物なら離縁して下され」という言葉まで出てしまっただけで喧嘩になる。

夫婦喧嘩の後も、与四郎は何かを求めている美尾の気持ちは知らず、「一日も百年も同じ日を送」るのであって、その時より美尾は顕著に変貌する。

美尾が兎に角に怪しく、ぼんやりと空を眺めて、物の手につかぬ不審しさ。(五章)

この描写からわかるのは、美尾が自分のみすぼらしさと欲望を満たせない現実に虚脱感を抱いていたことである。与四郎は妻のそのような物思いを「恋に心をうばはれ」たどしか考えられず、「甲斐なき活計」を甲斐あるものにしたと切望する美尾に対しても、

「碌でもなき根すり言」しか言えないのである。妻をまったく理解し得ない与四郎に対して、語り手は、「斯くて終わらば千歳も美しき夢の中にすぎぬべう見えし」(三章)、

「与四郎は何事の秘密ありとも知らざりき」(三章)、「母を眼下に視下して、放れぬ物に我一人さだめぬ」(六章)と述べている。これらすべて与四郎を対象とした語りには、一人だけ何も知らずに自己充足している与四郎の姿が浮上する。語り手は彼のそのような態度に「斯くて終わらば」と、悲劇の予兆を見ている。妻との関係に齟齬を来しながら、なおかつ変わろうとしない男の愚鈍を嘲笑するかのよう、これらのことばを畳み掛けてくるのである。

美尾の決定的な変貌はおそらく次の「金紋の車」描写からであろう。

ありし梅見の留守のほど、実家の迎ひとて金紋の車の来し頃よりの事、お美尾は兎角に物おもひ静まりて、深くは良人を諫めもせず、うつうつと日を送って実家への足いとぐしう近く、帰れば襟に腮を埋めてしのびやかに吐息をつく。(五章)

美尾は物思いにふけり、忍んで吐息をつくようになり、これは彼女が夫の愛より「金紋の車」と象徴する「金力」を選択したことを物語っている。

さらに美尾が家出をして残したものとは、

いつも小遣ひの入れ場所なる鏡台の引出しを明けてみるに、これは何とせし事ぞ、手の切れるやうな新紙幣をばかり、その数およそ二十も重ねて(七章)

の「金」であった。与四郎宛の手紙が一通あり、「美尾は死にたる物に御座

候。行衛をお求めくださるまじく、此金は町に乳の粉をとの願ひに御座候」という内容で、これで夫婦の縁は切れたのである。

美尾が金力に心が引かれた直接的な原因には、まず夫との関係から考えなければならない。新たな可能性を求めて煩悶する妻と、状況認識を欠いた夫とのずれがこのような結果をもたらしたのである。美尾の家出によって二人は離縁という結果になってしまう。当時の離婚のパターンを見てみると、美尾の家出による離縁がどれほど画期的な出来事であったかがわかる。明治時代とはいえ、人々の生活の上では昔ながらの風習がそのまま残されていたのであった。時代は前に遡るが徳川時代には^(註2)、

離縁の権利は夫にあつて妻にはあらず、もとより離縁が妻またはその実家の申出に起因することあり得べし。しかれどもその許否は夫の権内にあり。かつ当時の思想にては、妻またはその実家が離縁の申出をなすことは、倫理に反すとなせり。

というような状況であり、また、

○離縁ノトキハ必ス離縁状アルモノトス。其状ハ必ス夫タリシ者ヨリ婦タリシ者ノ名宛ニテ自筆ニ記シ爪印ヲ押ス事ナリ。若シ自筆スル事能ハサレハ三本半ノ豎線ヲ画シ爪印ヲ押ス。所謂三行半ノ旧例アルカ故ナリ。
(相模国鎌倉郡)^(註3)

とあるところから、おそらく明治時代までもこのようなことが一般に考えられて来たと考えてよからう。

美尾の家出は当時の女性の自我実現あるいは自我克服のための流行とも言えるものであったが、実際には美尾は与四郎から逃げられなかった。美尾は与四郎に正式の離縁をしてもらえなかった。美尾の一方的な家出によって外見的に二人が離縁した状態にはなったものの、法律的には二人は厳然たる夫婦であった。当時の離縁のしきたりと言え、いわゆる「三下り半」のしきたりであろう。江戸時代において庶民が離婚するときは、嫁入り、婿入りを問わず、必ず夫から妻へ交付することを必要とした文書である。これらの授受によって夫婦とも再婚することができた。与四郎は美尾に俗称「三下り半」の離婚状を渡しておらず、自分も再婚しなかったため、美尾の方も再婚でき

ず、一生人の妾としてしか生きられない結果となる。与四郎と美尾の場合に類似している当時の例示をみよう。

○離縁状ハ夫自署シテ押印スルヲ例トス。婦不埒ノ所行等アリテ里方へ帰り居ルトキハ容易ニ此状ヲ付与セス。或ハ生涯付与セサル者アリ。他嫁ヲ許サスシテ其罪ヲ責ルノ意ニ出ル事ナリ。

(伊勢国度会郡・志摩国答志郡)^(註4)

とあるように、愛情を注いだ妻の裏切りに対する夫の復讐でもあったとも云えようか。

「金」ゆえ妻に家出されてしまった夫の与四郎は「金力」をもとめることにだけ熱中する。

浮世の欲を金に集めて、十五年がほどの足掻きかたとしては、人には赤鬼と仇名を負せられて、(八章)

与四郎の金に対する執着が妻の裏切りに起因したとはいえ、与四郎は人に「赤鬼」と呼ばれるほどの悪質な高利貸となる。与四郎が高利貸になった過程についての詳細な記述は見られないが、明治二十年代当時の質屋の利率と高利貸のそれとを比較することによって高利貸の実態が知れよう。質屋の利息は、十円に対する月利として明治20年27銭5厘、明治24年25銭4厘、明治28年23銭2厘、とあったのにたいして、高利貸の利子は、明治27年の記録によれば、1円に日歩3銭の利子だったとある^(註5)。『日本の物価と風俗130年のうつり変わり』に次のような報告が見られる。

高利屋の悪逆は常に耳にする所なるが、解散を命ぜられし広島同愛舎は一時廃滅に帰したれども、この頃に至り其の筋の目を逃れ、府下の各貧窟に入り込み、暗々裏に一圓、二圓の金をまきて貧民の血を吸ふ怪物なり。其の貸附方を聞くに、一圓の金に日歩三銭宛を課し、若し返済出来ざるに於ては、貧愚の民を嚇して多からぬ家財道具に封印を為して手をつけざらしめ、又は甘言を以て貧民の儿女に茶屋奉公を勧め、上州邊に連れ行きては達磨に売りこかし、その儿女をしてのつびきの出来ぬやうにして、彼等のみうまき汁を吸ひ居るとかや、是等の事は宜しく其の筋にて注意ありたきもの也。(明治27年八月十日)^(註6)

人に「赤鬼」と呼ばれるほどの悪質の高利貸となった与四郎の姿がこの報告からもうかがわれる。同時代の、高利貸を小説の素材として取っているものとして尾崎紅葉の『金色夜叉』がとりあげられる。『金色夜叉』には、宮が富山の縁談を受け入れ、その為に失恋した貫一が人格を一変して高利貸になるという筋である。『金色夜叉』と『われから』とは「色をもって富貴を得べし」と考えられた女主人公が登場していること、恋する女性に富の問題でみかえられた男主人公が以前の性格を一変し、「強欲一点の非道」を十年程かさねて巨万の財をなすことで全く一致している。もちろん、『われから』の美尾は家出で物語から退場し、与四郎も幾万金の財をなしながら「五十にも足らで急病の脳出血」のために死んでしまうことになっていて、『金色夜叉』の後半の筋が『われから』には見られないが、両作品ともに「愛」と「金力」が素材になっていて、そこに「高利貸」が登場しているのである。

与四郎は「愛」を失ってから「金」を道具に「金力」をつけるが、その「金力」を手にしてからは「死灰」のように五十あまりの生涯を終わらせる。

最初は愛で結ばれていた美尾と与四郎の夫婦関係は、金力によって壊れてしまった。美尾にとって与四郎の「愛」は、「金力」によって叶えられるものではなく、与四郎にとって「金」は、失った愛を戻してくれることもできない空しい「力」であったのである。

4. お町と金村与四郎

お町は肉親の愛を知らぬ女である。母は、お町を生んで間もなく、夫と乳のみ児を置いて家出をした。父の与四郎は「母親似の面ざし」をお町に見て、「見るに、癩の種」と寄せ付けもしなかった。与四郎とお町の親子関係は愛情のひとかけらもみえない屈折したものであった。

お町は恭助に「言ふに言はれぬ淋しい心地がする」と涙ながらに訴える。数少ない彼女の言葉ながら父親の愛に飢えた孤独な幼女期の精神的な彷徨を見ることができる。本人には明確に認識されていないが、愛情という精神的支柱を持たずに育ったことが、彼女の不安の重要な源泉となっていたことは間違いない。

お町の孤独の根本的な原因となるのは肉親からの愛情の欠けたところにある。お町が幼い日からの孤独を夫の恭助に語っている場面には父親の愛に欠けた彼女の姿が浮上する。

悲しかるべき事今おもふても愁らし。私は貴郎のほか頼母しき親兄弟もなし。ありてから父の与四郎在世のさまは知り給ふ如く、私をば母親似の面ざし見るに、癩の種とて寄せつけも致されず、朝夕さびしうて暮らしましたるを、(九章)

与四郎が娘に愛情を注がなかった、あるいは注げなかった原因にはおそらく金のため自分を捨てた「悪婆」の美尾にお町が似ているということの外に、お町が真の娘でないのではという気も大きく作用しているのであろう。

お町の誕生に至るまでの細かな時間経過の記述は、お町が与四郎の子でないことを示していると私は思う。生後間もないお町について、「誰れに似たるか彼れに似しか、其差別も思ひ分かねども、何とは知らず怪しう可愛くて」と記述されているのもその暗示であろう。美尾が家出した後の父と娘については、細かな叙述が見えない。ただ与四郎が「浮世の欲を金に集めて」、赤鬼と呼ばれるようになったこと、お町が「目鼻だちより髪のかゝり、齒ならびのよい所まで、似たとは愚か母親をそのまゝの生まれつき」で、与四郎が、それを嫌って寄せ付けようもしなかったこと、そのためお町が「朝夕さびしうて暮らしました」と回顧しているだけである。

お町と与四郎の親子関係は「金力」でつながっている。莫大な財産を相続したお町は父親から愛情はもらえなかったものの金力をもらうことができ、それを媒介に夫と結び付けられているのである。

五十に足らぬ生涯のほどを、死灰のやうに終わりたる、それが余波の幾万金、今の金村恭助ぬしは、その与四郎が簪なりけり。あの人あれ程の身にて人の姓をば名告らずともと、誹りしもありけれど、心安う志す道に走って、内を顧みる疾しさなきは、これ皆養父が賜物ぞかし。(八章)

父親からの愛情の欠けたお町と金力が目当ての恭助との金だけによる繋がりは、父親によるものであり、それは愛した妻にみかえられた夫の、妻への、またその妻と似ている娘への一種の復讐でもあったのである。

5. おわりに

はじめに言及したように、原初的な愛情を受けたことのなかったお町と、その母美尾との親子関係、最初は愛情で結ばれていた美尾と与四郎の夫婦関係、不義の子として父親から疑われながら育ったお町とその父与四郎との冷たい親子関係、などを考察してきたが、いずれも不幸な結末を迎えている。これは、「金力」を求め「愛」を顧みなかったところから起因しているものとして本号で眺めてきた。父与四郎の急死によって富を手にしたが夫の愛情に飢えているお町と、その夫恭助との仮装パターンの夫婦関係におけるお町の「一念」は成就するか、についての考察等は次号に譲りたい。

注

- (1) 二月に出した戸川秋骨宛の手紙の下書き（日記『みずの上』収録）に、「このほどの夜は御入成しよしを、病気にてはやくに打ふし存じ申さず、無礼御ゆるし下され度御一処成し御かたかたへよろしう御わび願上候」と記している。そのまま不調が続いたことは、五月十七日付けの馬場胡蝶からの手紙に、「御いたづき此程はおこたり給ひしや・・・心にはかゝりながら御見舞も申上後れ何共恐入候」とあることから窺える。一葉自身も、三十日付けの返書に、「此春御めにかかりし頃より病気さらによくなり申さずたゞ気がふさぐやうにて困り入候」と書いている。
- (2) 中田 薫『徳川時代の文学に見えたる私法』、創文社、昭和31年9月
- (3) 『日本婦人問題資料集成』第五巻＝家族制度 ドメス出版 昭和51年2月
- (4) 上(3)と同じ
- (5) 『日本の物価と風俗130年のうつり変わり—明治元年～平成7年—』編集・発行 文教政策研究会 1996年2月
- (6) 上(5)と同じ